

国語

氏名	
----	--

受験上の注意

1. 試験時間は50分間です。
 2. 解答用紙の座席番号と、机に貼られている座席番号が合っているかを確認してください。
 3. 試験監督の指示に従って、問題冊子には氏名を、解答用紙には受験番号・氏名を書いてください。
 4. 印刷が読みにくかったり、解答用紙が破れたり汚れたりした場合は、静かに手をあげて試験監督に知らせてください。
 5. 気分が悪くなったときは、静かに手をあげて試験監督に知らせてください。
 6. 問題を解き終わっても、途中退室はできません。
- ※ 字数制限のある問いでは、句読点や符号（ 、 。 「 」 など）も1字と数えます。

一、次の各問いに答えなさい。

問一 次の――部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① シュウトクブツを交番に届ける。
- ② 友人の意見にビンジョウする。
- ③ 災害からフツコウする。
- ④ 地球はジテンしている。
- ⑤ 地震が起きるヨチヨウが見られた。
- ⑥ 彼は趣味も多く、ハクシキである。
- ⑦ 髪をタバねる。
- ⑧ よくウれた柿を食べる。

問二 次の慣用句・ことわざを含む文について、☐に当てはまる漢字を答えなさい。

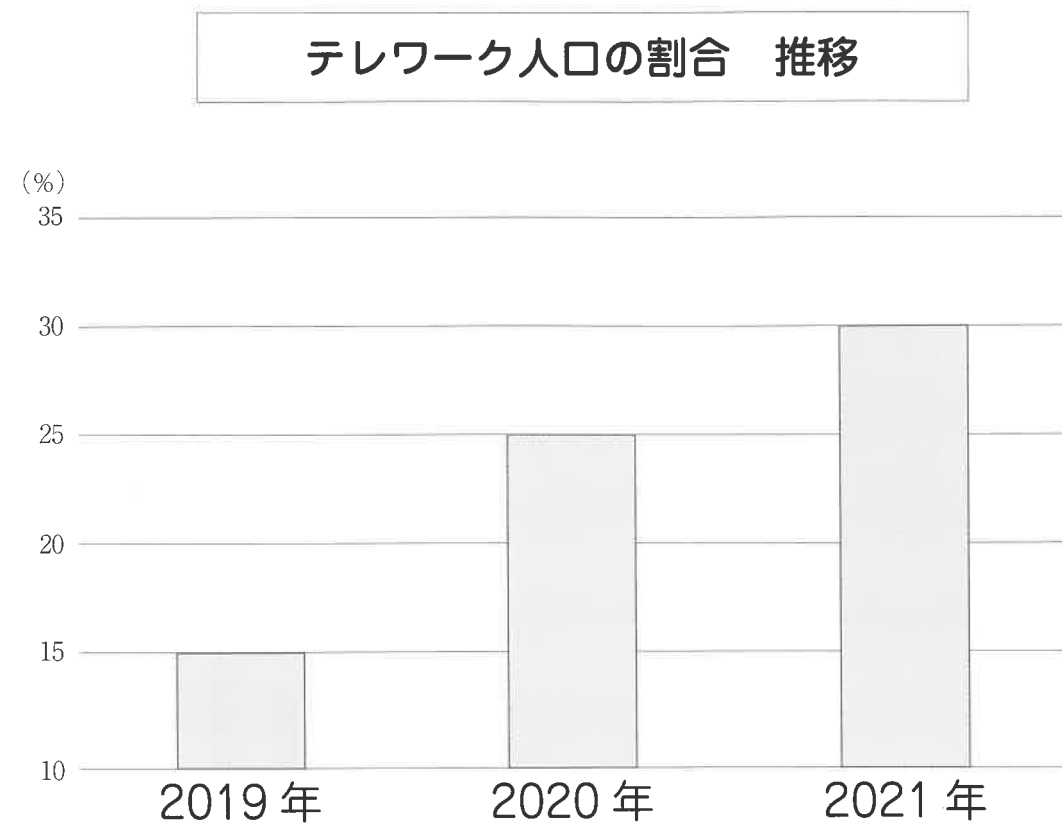
- ① 彼が東京に行くなんて☐☐（二字）の霹靂だ。
- ② 彼女は沈黙が続く会議で☐☐（二字）を切った。

問三 次の各文の――部が直接かかる部分を例のようにぬき出しなさい。ただし、句読点は含みません。

（例）雨が降ったので、洗濯物がぬれた。 解答 降ったので

- ① 少年は お気に入りの海辺で 真っ赤な 夕日が 水平線に 沈む 光景を 見つけた。
- ② この、人類が 繁栄を 極めて いくまでに 山積みになった 問題が、今後 我々を 追い詰めて いくだろう。

問四 次のグラフ中のテレワーク人口の割合の変化に着目し、そこから読み取れることを一つあげ、四十字程度で書きなさい。その際、(注意事項)の1・2にしたがうこと。



国土交通省「テレワーク人口実態調査」をもとに作成

※テレワーク人口…情報通信技術を活用した、場所や時間にとらわれない柔軟な働き方をしている人の総数

(注意事項) 1 文の主語を明らかにすること。
2 数字を表記する際、次の例を参考にする事。
(例 二十% 三十五% 二〇一〇年 二〇一六年)

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

① 我々人間は、現在南極大陸を除くすべての大陸の、あらゆる異なった環境条件の下で生活しています。極寒の北極圏にも人間は住んでいますし、灼熱の砂漠という極度の乾燥地帯や、それとは反対の極めて雨量の多い雲霧林にも人類は分布しています。また周りを海で囲まれた絶海の孤島に住み着いている人々もいるのです。それなのに一体どうして人間という生物だけは、このように極端に異なる環境の下に広がっても、どこでも同じ人間としてあまり変化せずに生きていくことが出来るのでしょうか。もしかしたら人間という生物は体のどこかに、他の生物には見られない、体や性質が変化変容することを妨げる、何か独特な平衡維持(ホメオスタシス)を司る器官でも持っているのでしょうか。

② そうではありません。私の考えでは、人間だけが他の生物とは違って、自分の体を環境に直接さらしていないから、が答えです。人間は他の全ての生物のように、環境に密着して生きていないからなのです。

※2 以上のことを簡単にまとめると、一般の生物は環境との関係が直接であるために、常に自分を取り巻く環境の変化に巧く適合するようにと、自分の体や性質を少しずつ変化変形させて生きてきているのだということになります。ところが人間という生物だけは、他の生物のように自分の体や性質を環境の変化に応じて変化させることをせずに、環境と自分との間に『文化』という名の言わば中間地帯を介在させ、この中間地帯を自然環境の変化に応じて変化変形させる、
Ⅰ 自然環境の変化をそれに吸収させることで、自分自身は環境の変化を直接には受けずに生き延びていく生物なのです。
Ⅱ 人間は甚だしく異なった環境に分かれて住むようになって、体や性質はそれほど変化せずに済んでいるのです。

④ その代わり人間を取り巻くこの文化という中間地帯の形状や性質は、住む地域の様々な条件に応じて変化変貌しなければならぬために、結果として世界には、多種多様な相互に異なる『文化』が A に存在することになるのです。

(中略)

⑤ この中間地帯としての文化とは、文化人類学において、〈広義の文化〉と言われるものとほぼ同じです。そこにはどんなものが含まれるのかを具体的にあげますと、第一は食物を加工し食べやすくするための『道具』『火』の使用、そして寒さを防ぐための『衣服』、さらには雨露を防ぐための何らかの構造物、つまり『家』などです。

⑥ 石や金属の刃物があれば、動物のように、獲物に直接噛み付いて肉や骨を噛み砕くための丈夫な牙や歯を持つ必要はありませんし、何らかの動物を殺して、その皮で体を覆うことができれば、一般の動物がするように長い毛を体に生やすことで、寒さを防がなくともよくなります。

Ⅲ 言語を使うことなども、人間を他の生物とは異なった特殊な生物にしている重要な文化の要素です。

⑦ なかでも言語は道具や衣服と違って、触ったり目に見えたりするものではありませんが、環境からの刺激や情報を人間が感知した結果を処理し、そのことを仲間に伝えることで、肉体的には強靱さを欠く人間が、集団的に協力して様々な環境にうまく対処することに役立っています。この文化にはさらに各民族集団に特有の風俗習慣、儀礼や宗教など様々なものが含まれますが、これらが生物としての人間を言わばすっぽりと包んで覆い、自然環境との間にあって環境の直接の影響から人間を守っていると考えられます。したがって言語や風俗習慣、そして宗教までが、住む場所の環境によって違わざるを得ないのです。

⑧ この文化という中間地帯（あるいは領域 domain）と言ってもよいと思いますが）は視点を変えようと、人間と自然環境との間に介在して、環境の影響を人間が直接まともに受けないようにするための、言わば外界からの衝撃を緩衝したり吸収したりする一種の装置（ショック・アブソーバー）の役目を果たしていると考えられます。そしてこの装置のおかげで、全生物の中で人間という生物一種だけが、自分自身の体の性質や形をそれほど変えずに、地球上のあらゆる異なった自然環境、たとえばすべてが凍てつく極北の地から炎熱酷暑の熱帯まで、さらには極度に乾燥した草木のほとんどない砂漠地帯から、すべてが正反対の熱帯雨林にまで分布を広げながら、それでも種としての

B を失うほどの性質や形状の変化を示さずに済んでいるのです。

⑨ 先に述べたように、人間以外の一般の生物は、環境が変化すればそれに適応するために、自分の体を新しい環境に合わせて変えることで、生き残りを図ります。④ 〈水は方円の器に従う〉と言われるように、水は注ぎ入れられた容器の形を素早く自分の形としますが、これと同じように一般の生物はまさに新しい環境に出会うと、それにピタッと合うように自分の体や性質を変えることで、生き残りを図るのです。これに対し人間だけは自分を変えずに、〈自分を取り巻く文化〉を新しい環境に合うように変化させることで対応します。その結果として地

球上の様々な異なる環境の下に、人間は自分自身の体や性質をあまり変えることなく、結果としてどこでも同じ人間として生き残ってきたのです。

⑩ このように生態学的に文化をとらえる考えは今まで提出されたことのない、文化がもつ人間にとつての働きの新しい解釈ですから、もう少し詳しく説明しましょう。

⑪ たとえば自動車の車輪は、一般には空気を詰めたゴムのチューブが中に収められている弾力のあるタイヤが、路面の凹凸などから受ける衝撃をうまく吸収して、車に乗っている人の体に衝撃がもろに伝わらないように作られた装置です。そして更にこの車輪そのもののまでが、さらに強力な板バネ（またはコイル・スプリング）やダンパーと呼ばれる、油圧を利用した衝撃吸収装置との組み合わせを介して、車体に

取り付けられているので、道路条件がいろいろと変化しても、車内の人は常に快適な状態を保つことが出来るのです。

⑫ これと同じような仕組みを持つ特殊な装置を、人間は体の周りに張り巡らしているのだと考えてください。このような、自然環境からの様々な刺激や衝撃を和らげたり吸収したりして、それを人間の体に直接に伝えず吸収してくれる一種の衝撃吸収・緩衝装置に包まれ守られているからこそ、人間は他の動植物とは違って、大きく異なった環境条件の下に広がって住むようになって、それぞれが人間として元々持っている、生物の種としての **B** を失うことがないのです。

⑬ その代わり、このような役目を担うことになった『文化』は、人間が異なる自然環境に住むようになれば、それに対応して人間を変化から守るために、それ自体が常に変化変容せざるを得なくなります。そして文化の主要な部分を占める言語も、⑥ 当然自然環境の違いを受け止め処理すべく変貌します。ですから人間の言語のもつ驚くほどの多様性とは、住居や衣服の違いや風俗習慣、そして宗教の違い、また食べ物の種類や調理法の違いなどと組み合わせあって、人間が地球上の、環境条件を甚だしく異にするどんな場所に住んでも、ほぼ同じ人間であり続けることを担保する重要な役割を果たすものなのです。

⑭ **Ⅳ** 人間の言語が持つ様々な音声や文法の違いを、直ちに人々の住む環境や風土条件の違いに結びつけて、明快に説明することは現段階では残念ながらできません。しかし用いられる語彙の種類や性質に限れば、これらの違いは人々の住む環境と密接に関係し、その違いを反映していることはよく知られている事実です。

⑮ たとえば北極圏で雪と氷に一年中囲まれて生活している狩猟民族の使う言語には、それぞれ違った性質や特徴を持っている氷や雪の、

部外者の目には僅かな違いとしか映らない性質の相違が人々の暮らしの安全や必要に大きく関わっているため、このような細かな違いは非常に多くの短い独立語で正確に言い分けられています。

- 16 ところが日本では冬だけ寒く時々雪が降るような場所でも、雪や氷についての独立語は、氷、つらら、雪、みぞれなどに限られていて、さらに細かい違いを表現したいときは、粉雪、綿雪などの複合語を用いたり、べとべとした雪とか、さらさらした雪といったように説明したりします。このような言い方で用が足りるということは、たくさん短い独立語ですべてが区別できる言語の場合に比べて、雪が持つ暮らしにおける切実さが少ないと言えるのです。

- 17 ですから文化人類学者は、ある言語の語彙のすべてを概観すれば、その言語を用いている人々がどのような風土条件のもとで、何をどのように食べ、家畜にどの程度依存して暮しているかといったようなことを、大雑把ではありますが、頭に描くことができるのです。このことが、言語は「ある人々の暮らしの概略を示す見取り図である」などと言われたりする理由です。

- 18 以上述べたような『文化』のもつ調節機能のおかげで、人間それ自体は、どのような自然環境に置かれようとも、互いに同じ人間であり続けるという、生物としては極めて特殊例外的な存在となっているのです。

(鈴木 孝夫『日本の感性が世界を変える』による 問題作成のために本文を一部変更したところがあります)

- ※1 平衡……………物事の釣り合いが取れていること。
- ※2 以上のことを簡単にまとめると……………1段落以前の、人間以外の生物と環境に関する記述を受けての表現。
- ※3 風俗習慣……………ある一定の集団社会の上で、広く一般に行われているしきたりやならわし。
- ※4 緩衝……………対立している物などの間にあって衝突や不和などを和らげること。
- ※5 先に述べたように……………※2と同じ。
- ※6 生態学……………生物と環境の間の相互作用を扱う学問分野のこと。
- ※7 概観……………物事の全体を大まかに見渡すこと。

- ※8 概略……………物事のおおよその様子。

- 問一 — 部①「どこでも同じ人間としてあまり変化せずに生きていくこと」とありますが、「人間」が「どこでも同じ」ように生きられるのは、なぜですか。次の文の、ア～ウの□に当てはまることばを、それぞれ本文中からぬき出しなさい。

人間は、環境と自分の間に言わば ア イ ウ (四字) としての イ (二字) を存在させることで、

ウ イ ア (七字) による影響を、直接受けずに済んでいるから。

- 問二 — 部②「常に自分を取り巻く環境の変化に巧く適合する」とありますが、「環境の変化に巧く適合」している例として合っているものを、次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 硬い木の実の多いガラパゴス諸島にたどりついた小さな鳥のくちばしが、木の実を砕いて食べやすくなるために、太くて硬いものに進化した。

イ 強風が吹くことが多い富士山において、カラマツの幹や枝が風を避けるために、上方向ではなく横方向へ伸びていくようになった。

ウ アフリカの乾燥地帯に咲く菊の一種が、水分蒸発を少なくするために皮を厚くし、少ない水分を求めて根を地下深くまで広げていった。

エ 木がまばらに生える熱帯の草原で生活をしているヌーが、水や食糧を得るために、乾季と雨季の切り替えに合わせて、大移動をした。

問三

I

IV

に当てはまることばとして適当なものを、それぞれ次のア～オの中から一つずつ選んで、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二回以上選ぶことはできません。

ア だから イ ところで ウ つまり エ ただし オ さらに

問四

A

に当てはまることばとして最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 原始的 イ 必然的 ウ 理想的 エ 本質的

問五

部③「言語や風俗習慣、そして宗教までが、住む場所の環境によって違わざるを得ない」とありますが、それはどういうことですか。最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 人間を環境の影響から守るために、各地域の環境が持つ様々な異なる特徴に応じて、異なる言語や風俗習慣、宗教が生まれてきてしまうということ。

イ 人間は環境に合わせて進化していくため、人間が住むそれぞれの環境に応じて、新たな言語や風俗習慣、宗教を生み出してしまふということ。

ウ 人間の住む自然環境が厳しくなると、人間は絶滅しないようにするために、住んでいる環境に合った言語や風俗習慣、宗教を生み出さなくてはなくなるということ。

エ 人間は環境が変わると、精神的に影響を受けやすいため、心の状態を細やかに表現できるように、さらに言語や風俗習慣、宗教を発達させなくてはなくなるということ。

問六

二カ所の B

に当てはまる共通したことばとして最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 相互性 イ 親和性 ウ 多様性 エ 同一性

問七

部④「水は方円の器に従う」とありますが、このことわざに近い意味のものとして最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 所変われば品変わる

イ 火のないところに煙は立たぬ

ウ 朱に交われば赤くなる

エ 青は藍より出でて藍より青し

問八

部⑤「これと同じような仕組みを持つ特殊な装置」とありますが、ここでいう「自動車の車輪」と「文化」はどのような点で同じですか。最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア どこにいても人間を人間らしく存在させる点。

イ 外界から受ける衝撃を和らげる点。

ウ 人間がそばにいないと存在できない点。

エ 地球上の至るところに存在している点。

問九 ― 部⑥「文化の主要な部分を占める言語」とありますが、「言語」にはどのような役割がありますか。本文中のことはを用いて、五十五字以内で答えなさい。

問十 ― 部⑦「言語は『ある人々の暮らしの概略を示す見取り図である』とありますが、なぜそう言えるのですか。最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 人間が厳しい自然環境に対応していく中で言語は多様化していったため、語彙の意味や文法の違いを調べれば、人々がどのように自然を克服してきたのが想像できるから。
- イ その地に住む人々が思いを共有するために言語は生み出されてきたため、その地域の言語の語彙の意味を調べれば、どのように相互理解を深めていったのが分かるから。
- ウ 言語を持つ語彙の種類や性質は、その言語を使う人々の住む環境と密接に関係しているため、使用されている言語を調べること、その地域の人々の暮らしぶりを想像できるから。
- エ 言語は文化も宗教も違う人々同士の交流の中で生み出されてきたものであるため、語彙の意味を正確に調べていけば、どのような交流をしていたかが分かるから。

問十一 ― 部⑧「『文化』のもつ調節機能」とありますが、これについて大宮開成中学校の先生と生徒が話し合いました。これを読んで後のア～エの□に当てはまることを、それぞれ本文中(10)～(14)段落からぬき出しなさい。

大場さん 人間は『文化』のもつ調節機能のおかげで、生物としては特殊例外的な存在になると筆者は言っているけど、『文化』の調節機能ってどういうものなんだろう。

先生 それについては、(10)～(14)段落を読んでいくと分かりやすいと思うので、皆で読んでみましょう。

宮沢さん そもそも『文化』は、人間それぞれが□□□□□□□□□□(十字)の下に住んでいたとしても、自然環境からの影響を直接受けないようにするために、外界からのあらゆる刺激や衝撃を

□□□□□□□□□□(十字)する役目を果たすものだよね。

開藤さん だから、人間はどんな場所に住んでいたとしても、自分自身の体を変えることなく、

□□□□□□□□□□(十二字)ことができたわけだね。

成田さん そうだね。人間を□□□□□□□□□□(六字)ために、『文化』が自然環境の違いを受け止めて、『文化』自体が

変化変容してくれている。その変化している機能を、筆者は『文化』のもつ調節機能って表現したんだね。

三、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

高校二年生の佐々木ひかりは、クラスをまとめるクラス委員である。秋の終わりにあった合唱コンクールでは、音楽一家に生まれた御木元玲が指揮をしたが、クラスはまとまらず、さんざんな結果になってしまった。

彼女の歌声に、そして合唱を導こうとする情熱に圧倒されて、すごい、すごい、この人はすごい、と涙が出そうだったのだ。御木元さんのことが猛烈に羨ましかった。敵わない。歌ではもちろん、人間としてぜんぜん敵わない。勉強そのものが好きなわけでもないのに勉強してクラス委員をやっているだけじゃ、だめだ。それは勤勉ではなく、むしろサボタージユなんじゃないか。初めから春を捨ててしまうのは、逃げてゐるってことなんじゃないか。

でも、どうすればいいのかわからなかった。ずっと人のまとめ役で、今さら自分にも何かほしい、何者かになりたいなんて、いったい何をどうすればいいのだろう。べつにいちばんにならなかつたていい。ただ一所けん命になれる何かがほしくてたまらなくなつた。

合唱コンクールの前後、無口になつてしまつた私を友人たちが氣遣つてくれた。どうかしたの、とか、ひかりらしくないよ元氣出してよ、とか、たくさんの子が声をかけてくれた。やりにくいよね御木元さんて、なんて眉をひそめる子もいた。

「なんか、わかるよ、ひかりの気持ち」

そうつぶやいたのは千夏^{※2}だった。千夏は合唱コンクールでピアノを担当していた。お氣楽そうな千夏に何がわかるのかと思つたけれど、意外に真剣な目を見たら何もいなくなつてしまつた。

「御木元さんを見ると、自分にはなんにもないんだな、つてつくづく思うよ」

千夏はいい、それからにつこりと笑つた。

「それなのに、不思議なんだ、見ていたいんだよ。御木元さんにはどんどん進んでいつてほしいし、それをずっと見ていたい気持ちになるんだ」

半分くらい、同じ気持ちだ。でもあとの半分では、羨んでいる。春もなく夏も秋も冬も無視して、歌うことで何の迷いもなく進んでいけ

る御木元玲と、なんにもない私。

「なんにもないって思わされて、平気？」

聞くと、ちよつと考えるから千夏は答えた。

「……これからじゃないかな。なんにもないんだから、これからなんじゃないの、あたしたち」

のんきだな、と思う。あたしたち、と一緒にされたのもなんだか面白くない。ただ、これから、という千夏の言葉に賭けてみたい氣もした。そうでなければ、私は一生冬のまま、春から目を逸らして生きていかなければならない。

あのときから、何が変わったのだろう。

クラス替えを目前にして、このクラスでもう一度合唱コンクールの歌を歌わないかという提案が担任の浅原^{あさはら}から出されている。また御木元さんの力を見せつけられることになる。わかつていたけれど、はい、と答えた私の気持ち。クラスのみんなの気持ち。そして御木元さんの気持ち。ほんの何か月前のあの頃とは変わっているのがわかる。

冬のマラソン大会で、私たちはもう一度あの歌を歌うことになった。合唱コンクールではさんざんな出来に終わった『麗しのマドンナ』を、マラソン大会で走る御木元さんの応援歌として歌つたのだ。そのときに思いがけず見た彼女の一粒の涙が私たちの胸を濡らした。彼女を固めていた雪が溶けかけているのがわかつた。

たつたそれだけで、だ。私たちは変わった。毎日、昼休みや放課後に十五分ずつ続ける練習にほとんどクラス全員が揃うようになった。本番直前となつた今日からは、浅原の肝煎で終礼の時間から音楽室を使わせてもらっている。ただし、浅原本人は顔を出さない。先に見ちゃつたらつままないじゃない、と彼女はあくまでも陰から楽しむつもりらしい。

「ここは明るく歌うところなの。もう歌詞も覚えたでしょ？ できるだけ楽譜は見ないで、顔を上げて」

御木元さんの指示で三十の顔が上がる。

「じゃあ四十八小節、出だしから」

千夏のピアノが鳴り、みんなが歌い出すとすぐにまた御木元さんが腕を振つて歌を止めた。

「もうちょっと明るく歌おう。マドンナたちの華やいだ気持ちになつて。さあ、明るい顔をして」

そういつて自ら明るい笑顔をつくつてみせた。そうして、こちらを見渡して、

「明るい顔ってわかる？ 頬骨を上げて。そう、そして目の奥を開けて。はい、各自十回、目の奥を大きく開けて、閉じて、開けて」
えー、どうやってー、とあちこちから声が上がった。

「目の奥に扉があると思つてみて。そこを大きく開くイメージ」

御木元さんは大きく目を見開いている。くすくす笑い声が聞こえる。

「あれつて扉じゃなくて目そのものじゃん」

早希が小声でいい、それでも真似をして大きく目を開いている。

すごいなあ、と私は素直に感心している。御木元さんがこんなふうに指示を出せる。みんながそれに従っている。音楽というのは、お互いの親密さと信頼があつて育つていくものらしい。マラソン大会のゴール前で芽を出した私たちの歌は、時間をかけて、今、ゆっくりとふた葉を開いたところくらいだろうか。

「そうそう、いいね、そんな感じ。みんないいかな、顔の明るさを忘れないで。これで声のピッチが揃うよ」

御木元さんの右手が挙がり、千夏のピアノが弾む。

よろこびの歌がはじまる。ほんとうだ、みんなの声が明るくなっている。

御木元さんが指揮の腕を大きく振るその軌跡から音楽があふれ出す。私たちの声が伸びていく。重なっていく。弾み、広がり、膨らんでいく。

歌が終わつても、まだ光のつぶがそこかしこに残つていような感じがする。汗ばむような熱気を逃したくて、窓を開けに立つ。重いサッシを開くと、さっと風が入り込んできた。頬に受ける風が気持ちいい。もうすぐ、春だ。

三月に入れば卒業式がある。その前日、卒業生を送る会で歌うのがこの合唱のゴールになる。

「ものすごく楽しみにしてるからね」

浅原は教師らしからぬ不敵な笑みで私たちを挑発する。のるよ。受けて立つよ。クラス委員はクラスの気持ちを代表して胸を張る。

「ひかり、それじゃ浅原の思うツボだつて」

「合唱は気合いで歌うものじゃないつてわかつてるよね、ひかり」

意気込む私にあやちゃんが、史香が、みんなが口々に声をかける。ああ、こういうとき、春なんじゃないかな、と思う。今、もしかすると私は春のまつただ中にいるんじゃないか。

御木元さんが一度、手を大きく打った。

「じゃあ今日の仕上げ。最後にもう一度、通していつてみよう」

その声で、音楽室の中がしんとなる。

「さあ、明るい気持ちを忘れないでね。あ、待つて、ひかり、背筋を伸ばそう」

はい、と姿勢を正しながら、小さな驚きとよろこびに打たれてしまった。今、御木元さんが、ひかり、と呼んだ。佐々木さんから、昇格だ。

家に帰ると、めずらしく父がもう食卓についていた。

「おかえり。ひかりはけっこう遅いんだな」

「うん、今、クラスの合唱の仕上げ。いつもはもうちょっと早いよ」

テーブルの上にお赤飯の折がちょこんと載っていた。

「どうしたの、このお赤飯」

どこかでお祝い事でもあったのかと思ひながら取り箸に手を伸ばすと、

「さらりのお祝い」

母がうれしそうにいうのでぎよつとした。姉を見ると、照れくさそうにしている。

「やだ、お姉ちゃん、結婚決まったの？」

やだ、じゃない。ぎよつとすることもない。姉はきつと早いうちに結婚するだろうと思つてはいたのだ。今年、二十四になる。もういつ

結婚してもおかしくない歳だ。

「違うわよ」

母が笑う。

「ほら、ちゃんと自分でいいなさい」

促されて姉が口を開いた。

「やっとな進路が決まったの」

「進路お？」

思わず大きな声を出してしまった私に、姉が小さくうなずく。

「看護師になったかったんだ。でも今さらいえなくて、こっそり看護学校を受験してたの。その合格通知が今日来たのよ」

そういつて分厚い封書を取り出してみせた。隣で母が大きくため息をつく。

「この子ったら短大出てもふわふわ、お勤めしてもなんだかふわふわふわわしてて、いったいどうするつもりなのかずっと心配だったんだから」

「あれ、学生の頃に看護師になりたいっていったら、そんな大変な仕事、きらりには無理だっただけのお母さんでしょ」

「そういわれたくらいであきらめるようじゃ、反対したくもなるわよ」

やんわりと応酬を続けるふたりを見くらべながら、なんだか新しい風に吹かれたような気がしている。持って生まれた資質でいつも春のように笑っている姉のことが、自慢でもあり心配でもあった。ほんの少し、妬みもあったのかもしれない。でも、その姉がきちんと春以降を見据えていた。

「おめでとう」

姉はにこにこ私を見た。

「ありがとう。あたしはひかりみたいに頭がよくないから、試験に落ちたらどうしようってほんとどきどきしてた。この歳だから、もうあとながないしね」

あとはある。何度でもチャンスはめぐってくる。今の私にはそう思える。

「でも、ぜんぜん気づかなかったよ。仕事のあとに勉強してたの？ えらいね。あたし、お姉ちゃんはずっと春みたいな人だと思ってた。」

春のまんまずっと行くんだと思ってたよ。秋に備えて、準備してたんだね」

「あー、ばかにしてるー」

姉が笑った。そして屈託のない声でいった。

「でもさ、春のあとには、秋の前に、夏が来るんじゃない？」

「いいなあ、おまえたちはこれから夏か」

それまで黙っていた父が口を挟む。

これから夏、といわれて一瞬ぼかんとした。考えたこともなかった。春でさえまぶしいのだ。夏なんて私には想像もつかない。

「まだ見えねえだろ」

※6 亮太郎の声は耳によみがえる。春の背中、と彼は続けた。

8 だいじようぶかもしれない。じたばたもきながら、このまんまで生きていけるかもしれない。私にはなんにもなくても、たくさん声が聞こえる。ひかり、ひかり、と呼ぶ明るい声たち。

「まだ見えねえだろ」

9 うん、まだ見えないみたいだよ、亮太郎。いつかこの春の背中が見えてきたら、追いついて、追い越してやればいい。怖れることはない。だって、春の先にあるのは、夏なんだな。私たちは、まだ、これからだ。

(宮下 奈都『よろこびの歌』による 問題作成のために本文を一部変更したところがあります)

※1 サボタージュ……………なまけること。

※2 千夏……………原千夏。ひかりの級友。後に登場する「早希」「あやちゃん」「史香」も同じクラスの友人。

- ※3 肝煎……………心を配って、熱心に世話を焼くこと。
- ※4 声のピッチ……………声の高さ。
- ※5 折……………薄い木の板などで浅く箱型に作った、料理や菓子などを詰める容器。
- ※6 亮太郎……………ひかりの幼なじみ。高校入学後、心がおどるような素敵な時間はいつか終わってしまうことをおそれるひかりに「まだ見えねえだろ」「春の背中だよ」と話していた。

問一 部a「眉をひそめる」・b「不敵な」・c「屈託のない」の本文中での意味として最も適当なものを、それぞれ後のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

a 「眉をひそめる」

- ア 他人の発言や行動にだまされないように、用心する
- イ 他人のわがままな行動に気分を悪くして、苦しい顔をする
- ウ 他人の顔色をうかがって、雰囲気^{ふんいき}を壊さないようにする
- エ 他人のいやな言動に対して、不快な顔をする

b 「不敵な」

- ア 恐れることを忘れたような
- イ 何かをたくらむような
- ウ 勝ちほこったような
- エ 場にそぐわないような

c 「屈託のない」

- ア おびえる心がなく大胆^{だいたん}な
- イ へりくだることのないような
- ウ 心配事がなくさっぱりした
- エ 他人の思いを気にしない

問二 部①「春もなく夏も秋も冬も無視して、歌うことで何の迷いもなく進んでいける御木元玲」とありますが、実際の「御木元玲」は、級友との関係をうまく築^{きず}けず、「冬」のようなつらく苦しい時を過ごしていました。そのことが比ゆを用いて示されている部分を本文中から九字でぬき出しなさい。

問三 部②「私は一生冬のまま、春から目を逸らして生きていかなければならない」とありますが、これを説明した次の文の、ア～ウの□に当てはまることばを、それぞれ本文中からぬき出しなさい。

- ひかり自身、^ア□□□(三字)になろうと^イ□□□□□(五字)になることもせずに、^ウ□□□(二字)なふりをし続けなければいけないということ。

——部③「私の気持ち。クラスのみんなの気持ち。そして御木元さんの気持ち。ほんの何か月前のあの頃とは変わっている」とありますが、「クラスのみんなの気持ち」が「変わっ」た理由を説明したものととして最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 合唱コンクールの結果に絶望した御木元さんが、級友の歌のおかげで、マラソンを完走できたから。

イ
合唱を必死に導こうとした御木元さんの、級友の励ましに涙する姿にクラスみんなが感動したから。

再び合唱を発表しようと先生に言われて、今度こそ御木元さんと一緒に頑張ろうと思ったから。

工 合唱を頑張った御木元さんを泣かせてしまったので、今度こそみんなで笑おうと決意したから

——部④「こんなふうに指示を出せる」とありますが、御木元さんの指示の出し方を説明したものであるとして最も適当なものを、次の

ア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 級友に改善をうながそうと、自ら手本を示すことで、級友がついていきたくするような雰囲気を作っている。

イ 自分の実力を示すことで、級友に尊敬の念を抱かせ、自分についてこざるを得ない状況を作っている。

ウ
合唱へのこだわりを捨てて、級友を笑わせることで、級友が緊張せずに歌えるよう工夫をしている。

工曲の音程やリズムだけではなく、作曲者の思いをわかりやすく解説することで、クラスに一体感をもたせている。

——部⑤「春」と⑥「春」の表す内容の違いを「⑤は、⑥は」という違い。」という形で、自分のことばで二十五字以上三十五字以内で答えなさい。なお、「⑤」「⑥」はそれぞれ一字として数えます。

⑤⑥はそれぞれ一字として数えます。

——部⑦「お姉ちゃんはずっと春みたいな人だと思つてた」とありますが、この表現について大宮開成中学校の先生と生徒が話し合いました。これを読んで後のア→エの□に当てはまることばを、本文中からぬき出しなさい。

先生のひかりはなぜ姉であるきらりを「春みたい」とたとえているのか考えてみましょう。

大場さん

短大を出て、就職をした時の様子を母は

ア

(四字) って表現しているから、春の

☐ ☐ ☐ ☐
 (四字) した雰囲気の人っていう意味じゃないかなあ。

宮沢さん

だからひかりもきらりが

イ

(二字) のことをしつかり考えていたことに驚いているんだね。

開藤さん
これって、ひかりとは対照的だね。だって、ひかりは自分の将来について、いつたい

[illegible]

宮沢さん　　本当だ、対照的だね。楽しい春が終わり辛い秋のような季節が来ることを恐れるひかりとは全く逆だ。

[illegible]

大場さん　　ひかりが、きらりを「春みたいなの」ってというのは、自分と対照的なきらりへの劣等感れつとうかんがあらわれているんだね。

問八

——部⑧「だいじょうぶかもしれない」とありますが、ひかりがそう感じたのはなぜですか。その理由を説明したものととして最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 卒業生を送る会の後には、自分たちが最上級生となって級友たちと勉学にはげむ日々が待っているから。

イ たとえ自分に才能がなくても、自分を支えてくれる級友がいることを信じられるようになったから。

ウ 今の自分には明るい未来は見えないが、時間は流れていくのでいつか楽しい時が来ると思えたから。

エ 友達との輝かしい日々はいつか終わってしまうのだが、その先にも輝かしい未来が待っていると思えたから。

問九

——部⑨「うん、まだ見えないみたいだよ、亮太郎。いつかこの春の背中が見えてきたら、追いついて、追い越してやればいい」とありますが、この表現について大宮開成中学校の生徒が話し合いました。これを読んで後のア～ウの□に当てはまることばを、※6を参考にしながら本文からぬき出しなさい。

大場さん ひかりは「春の背中」が「まだ見えない」って言っているね。「春の背中」って何だろう。

宮沢さん 本文の最後で「春の先にあるのは、夏なんだな。」ってあるよ。「春の背中」を追い越した先には夏があるんだよね。

大場さん じゃあ、「春の背中」は春の終わりのことだね。今ひかりは「春のまっただ中」にいるんだ。いったい、いつからひかりは「春のまっただ中」にいたんだろう。

開藤さん 級友の気持ちが一つになるきっかけのマラソン大会は□(一字)に行われていたんだよね。

成田さん でも、三月の発表に向けた練習では、御木元さんの指示もあって、歌い終わった後のあたりの雰囲気

□□□□(四字)が残るような明るいものだったと表現しているよ。これはもう春なんじゃないかな。

大場さん そうだね。ひかり自身その合唱を□□□(三字)が開いたくらいだととえているもんね。みんなと三月の発表

に向けた練習を始めたところから、ひかりは「春のまっただ中」にいたんだね。

問十

本文に関する記述として、正しいものを次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア ひかりだけでなく千夏やあちゃんなどの登場人物それぞれの視点から物語が描かれることで、それぞれの心情が分かりやすくなっている。

イ 「秋に備えて、準備してた」のように、季節を隠ゆとして表現することで、登場人物の置かれた状況を表現している。

ウ 「家に帰ると、めずらしく父がもう食卓についていた。」以降、親子の交流と級友との交流とを比較することで、それぞれの特徴を明示している。

エ 「マラソン大会」や「合唱コンクール」のような学生になじみ深い行事を描くことで、登場人物たちの複雑な人間関係を分かりやすくしている。

問題は以上です。

